

2023年5月28日 説教「驚きの出来事」

使徒の働き 2章1～13節

今朝はペンテコステ礼拝です。使徒の働き2章から学びます。

1. 聖霊降臨 (1～4節)

①五旬節 (1) 「五旬節の日になって、みながひとつ所に集まっていた。」

五旬節というのは過越の祭から数えて50日目の祭。七週の祭とも呼ばれます。後には、キリストの復活の日から数えて50日目に、聖霊降臨の出来事があったので、ペンテコステ(50番目の意味)とはキリスト教会においては、聖霊降臨日とされることになります。この日、弟子達は一つ所に集まり、祈りを共にし、主にある交わりをしていました。

②響き (2～3) 「すると突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。」

その所に突然、天から吹いてくる激しい風、響きと表現するしかない出来事が、家全体に充満したのです。聖霊が降臨したのです。さらに、何かが燃えているような舌が現れて、そこにいる一人一人の者たちの上にとどまったのです。

③聖霊に満たされ (4) 「すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しました。」

主の弟子達は聖霊に満たされました。そして、御霊の導かれるままに、話し始めたのです。それも、彼らは他国の言葉で話し出していました。

2. 外国語で話す弟子たち (5～8節)

①驚きあきれ (5～6) 「さて、エルサレムに敬虔なユダヤ人たちが、天下のあらゆる国から来て住んでいたが、この物音が起こると、大ぜいの人々が集まって来た。彼らは、それぞれが自分の国のことばで弟子達が話すのを聞いて、驚きあきれてしまった。」

散らされて世界各地に住んでいた敬虔なユダヤ人たちが、七週の祭のために集まっていた。彼らが驚いたのは物音です。大勢の人々が、そこに集まってきました。それほどに、聖霊降臨の出来事は、客観的にも大きな物音が伴い、他にはない響きを感じられたのです。

②ガリラヤ人なのに (7) 「彼らは驚き怪しんでいった。『どうでしょう。いま話しているこの人たちは、みなガリラヤの人ではありませんか。』」

彼らはともかく驚きました。なぜなら、自分達はいわば国際派だが、キリストの弟子達は外国にも出たことのないガリラヤ出身で、外国語などを話す素地のないユダヤ人達です。

③めいめいの国語で (8) 「それなのに、私たちめいめいの国の国語で話すのを聞くと、いったいどうしたことでしょう。」

彼らが話し出した言葉は、散らされたユダヤ人たちが、それぞれが生活している国の言葉だったのです。弟子達は賛美や信仰告白と思われる言葉をそれぞれの国の言語で話し出していたのです。



3. 各地に住むユダヤ人たちの反応 (9~13 節)

①各地に住む (9~10) 「私たちは、パルテヤ人、メジャ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポントとアジア、フルギヤとパンフリヤ、エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者たち、また滞在中のローマ人たちで」

その離散のユダヤ人たちが住んでいた人々の地域が列挙されています。「カパドキヤ、ポントとアジア、フルギヤとパンフリヤ」というのは、小アジア地域のユダヤ人。「エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者たち」とは北アフリカに住むユダヤ人たち。「滞在中のローマ人たち」というのは、ローマ人でユダヤ教に改宗した人々かもしれません。

②神のみわざを語る (11) 「ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレテ人とアラビヤ人なのに、あの人たちが、私たちのいろいろな国のことばで神の大きなみわざを語るのを聞こうとは」。

ユダヤ人ではないのにユダヤ教に改宗していた人々もいました。クレタ島に住むユダヤ人、シリア及びパレスチナ東部のユダヤ人。「あの人たちが、私たちのいろいろな国ことばで神の大きなみわざを語るのを聞くとは」とありますから、弟子達は確かに、霊的な事柄をそれぞれの国の言葉で語っていたのです。

③甘いぶどう酒に (12~13) 「人々はみな、驚き感って、互いに、『いったいこれはどうしたことか』と言った。しかし、ほかに、『彼らは甘いぶどう酒に酔っているのだ』と言ってあざける者たちもいた。」

御霊に満たされて外国語で賛美や信仰告白をしている様子が、喜びに満ち気持ち良さそうなので、人々は、弟子達がぶどう酒に酔っているのだとあざけたのです。

《結論》

今朝の説教箇所において、「驚きあきれる」(6 節)「驚き怪しむ」(7 節)、「驚き感う」(12 節)とある点に注目していきたいと思えます。言い方は違いますが、そこにいた人々が、あっけにとられるほどに驚いたのです。以下に三つにまとめてその驚きについて見ていきましょう。

第一に、聖霊降臨の出来事そのものへの驚きです。聖霊なる神が降臨される出来事ですから、当然のことでありましょう。それは、弟子達が一つの所に集まっていた時のことです。「突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。」とありますが、これが未だかつて経験したことのない響きであったことは確かです。その物音により、人々がそこに集まるほどでありました。来た人達は、何が起きたかわからずに、ただ驚いたことでありましょう。また、その出来事が何か神聖な雰囲気であったことは間違いなく、人々は本当に驚かされたのです。この驚きで、彼ら心はペンテコステ(聖霊降臨)が、人間からではなく、神からの事として、主を見上げることに向けられたことでしょう。

第二に、その出来事の直後に、そこにいたキリストの弟子達が、聖霊に満たされて、他国の言葉で話し出しました。その様を見て、そこに集まった者たちは、驚きあきれてしまいました。それは確かに外国の言葉であり、そこにいた離散のユダヤ人が住んでいる所で使っている言葉でありました。どんな国の言葉であるかは、9~11 節までにそれらの地域が記されています。弟子達は、ガリラヤ出身で語学を習ったわけではありません。ところが自由に語り始めたのです。聖霊に満たされた証しが、そのようなかたちで示されたのです。弟子達も、自由に舌が動かされたということでありましょう。そこにいれば、誰もが驚くような出来事でした。この驚きによって、彼らは神の御力の凄さを体感し、「神にとって不可能なことはない」という確信に向かわせたことでしょう。

第三に、弟子達が語らせられた言葉の内容についてです。それは、「あの人達が、私たちのいろいろな国の言葉で神のみわざを語るのを聞こうとは」(11 節)に記されていることです。弟子達は、聖霊に満たされ、外国語で神のみわざを語らせられたのです。神の創造のみわざ、神の愛、キリストの十字架と復活、そして聖霊のみわざなどについて語らせられたのではないのでしょうか。まさに聖霊の大なる御業は、見えるかたちで、弟子達を通して示されたのです。そこにいる者たちは、驚く一方、彼らは甘いぶどう酒に酔っているのだという人々もいましたが、その後の説教でペテロは朝の 9 時ですから、そのようなことはありませんと証しています。この驚きは結果的に、弟子達によるペンテコステが賛美と喜びに満ちていることを証し、それが大きく広がっていくことを暗示しているのです。

さて、このような驚くべき出来事が聖霊降臨の日には起きたのですが、私たちの時代にあっても、聖霊はこのような働きをしてくださるのでしょうか。エリザベス女王の葬儀時に、司式や説教をしたカンタベリー大主教は話の冒頭で Come Holy Spirit! と述べました。時代を経た現代に、「聖霊様、来てください」と願ったのです。私たちも共に叫びたいものです。それでは、聖霊に来ていただき、お関わりをいただくとしたら、あなたは何を求めますか。ここで言えば、外国語で話し出すことでありましょうか。奇跡的な御業でしょうか。切実な願いを抱えていけば、聖霊にそれを願い出ることは必然でしょう。さらに大切なことがあります。それは、あの弟子達が神の大きなみわざを語ったという点に秘密があります。つまりは、聖霊に満たされることによって、弟子達は神の存在と臨在、神の導き、助け、その愛などを一身に受けていたのです。主の圧倒的な伴いをいただいて、恵まれているのです。困難のなかにある者、失敗して失意の中にある者、辛い状況のなかで置かれている者。それらのすべての者を包む、聖霊の御臨在こそが、私たちにとって貴重であり、幸せなのです。それこそが、「無くてならぬもの」であり、「私たちの日を正しく数える」ことにもつながっていくのです。ペンテコステの主である聖霊が、真の平安と喜びを、私たちの内にもたらしてくださることを願い求めていこうではありませんか。それは私たちにも、「驚き」をもたらしてくれるものだからです。

聖公会カンタベリー大主教によるエリザベス女王国葬における告別説教

2022年9月19日(翻訳) * 説教原文はこちら

ジャスティン・ウェルビー大主教 告別説教のための聖書朗読箇所
コリントの信徒への手紙一 15章20～26節、53節から章末まで。続けて詩編42編1～7節、ヨハネによる福音書14章1～6節。

聖霊よ、来たりませ。

あなたの癒やしの愛の香油でわれらを満たしてください。アーメン

指導者の多くは、その生涯において高く評価され、その死後、忘却の彼方へと追いやられます。しかし、有名無名を問わず、また尊敬されたか否かを問わず、神のしもべにとって死とは栄光へと踏み出す扉です。

女王陛下21歳の祝賀放送にて「私の生涯をこの国(英国)とコモンウェルス(連邦諸国)への奉仕に捧げます」と宣言されたことは、あまりにも有名です。

さらに、このような約束が破られることなく、守られ続ける様を見ることはなかなかありません。ほんのわずかな指導者だけが、本日皆さまがご覧になった、溢れるばかりの敬愛を受け取るに足るのです。

聖書によりますと、主イエスは、弟子たちにどのように従うべきかではなく、誰に従うべきかを教えて「私は道であり、真理であり、命である」と語ります。女王陛下が示された模範は、その地位や大志によらず、まさしく誰に従うかによって示されたのです。新国王陛下が母エリザベス女王陛下と同じく、イエス・キリストへの信仰と希望、奉仕と義務への使命を分かち合っておられることを、私は存じ上げております。

女王陛下は1953年、まさに、その祭壇で、静かな祈りとともに戴冠式に臨まれました。人々が女王に忠誠を誓うよりも前に、女王陛下による神への忠誠が誓われたのです。「仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来られた」キリストに従うこと、神ご自身に従うことにこそ、女王陛下の基盤、この国とコモンウェルス、そして世界にあまねくある人々への奉仕の基盤があったのです。* 1

どのような職業であれ、愛ある奉仕を行う人は、あまり見受けられません。いわんや、愛ある奉仕に生きる指導者は稀です。しかし権力と特権にしがみつく者が忘却の彼方に追いやられても、奉仕した者は愛され、記憶されるのです。

今日、この日の悲しみは王族各位にとどまらず、この国とコモンウェルス、全世界が感じていることでしょう。女王陛下の豊かな人生と愛ある深い奉仕が、われわれから去ってしまったゆえの悼みです。女王陛下は喜びにあふれ、多くの人に寄り添い、多くの人生に触れられた御方です。

遺族となったすべての家族のために、ことに女王陛下の御遺族のために祈りましょう。愛する者を失い、深い悲しみのうちにある全世界の家族のために、ことに、いま耳目を集めるこの家族のために祈りましょう。神がその悲しみを癒し、この度、人生に刻まれた裂け目が、いのちと喜びの印となりますように。

コロナ禍におけるロックダウンの際、女王陛下は希望の言葉であるヴェラ・リンの歌「またお会いしましょう」で演説放送を結ばれました。* 2 キリスト教の希望とは、まだ見ぬものへの確実な期待を意味するからです。キリストは死からよみがえり、すべての人に命を与え、現在の豊かないのち、また永遠に神と共なる生を与えられました。クリスマスキャロルが語るように、「柔和な魂が受け入れるところに、愛するキリストが来る」のです。

われわれもまた神の慈悲深い裁きを仰ぐ日が来るでしょう。しかし、誰であれ、王でありながらもべとしての生き方に徹した、女王陛下の生と死に裏打ちされた希望を分かち合うことができるのです。人生における奉仕、死における希望。女王陛下が御示くださった模範に従い、神への信頼と信仰の促しを得た者はすべて、女王陛下と共にこう述べることができますのです。

「またお会いしましょう」

* 1 マタイによる福音書20章28節、マルコによる福音書10章45節

* 2 復活前主日2020年4月5日、イースターを1週間前に控えた日曜日の演説放送